



なつやすみのとも

6年1組

橋本コウ

夏休みの宿題は終業式の日にはさっさと終わらせた。真夏のはじまりを告げる太陽が沈む前だった。観察日記や図工の宿題はさすがにできなかったけど、回答すればいいだけの問題はドリルを全部埋めた。明日から小学校最後の夏休みだ。こういうときの僕はいつもの**10**倍くらいがんばることができる。いろいろやりたいこともあるし、できるだけ自由時間を増やしておきたかった。僕は机の横の壁に貼ってあるドラゴンボールのカレンダーを横目を見た。孫悟空が描かれている**7**月と、一枚めくったピッコロの**8**月を数えてみると、夏休み終了まであと**36**日。十分すぎる時間の休みが僕の前に横たわっていて、頬を緩めずにはいられなかった。僕は浜辺に波が涼しそうに打ち寄せている表紙の夏休みの友に「古河拓郎」と書き込んで、カレーの匂いが漂う階下に一段飛ばしで駆け降りた。

僕の住んでいる山間の町は、山はあるけど、海はない。太い国道は通っていても町を潤すわけでもなく、ちょっとしたショッピングモールがあるくらいだ。地方にありがちな寂れたこの町が僕は嫌いだ。遊ぶ施設が少ないから、広がる自然に遊び場を求めるしかなかった。

日本橋から数えて何百本目の橋にかかっているからついた川の名前は眉唾だけれど、水質はキレイで魚もけっこういるから、夏になると川遊びが多くなる。釣りとかで魚がかかるのを待ったりはせず、掴み取りで魚をとった。ほとんどがハヤだったが、まれに鮎が採れたときは持ち帰って母親に焼いてもらって食べた。魚を捕獲したときの達成感が大きい反面、生臭くなる手は嫌だった。

山には蛇がいるからあまり好きではないけれど、ちょうどジャンケンのパーの形に砂地になっている山があり、そこで遊ぶこともたまにあった。砂が柔らかくて、急斜面から飛び降りると幅跳だったら**10**メートルくらいは飛んでいる。砂地が切れて木々に囲まれた山頂から新しくできた高速道路を見下ろしても特に勝ち誇れることなんてなかったが、どこか遠くから来たかもしれない車の列を眺めるのは好きだった。きつともう会うこともない一家が僕の街を通り過ぎていくことに感動したが、虚しさもあった。

僕は二段ベッドの上でドラゴンボールの天下一武道会のシーンを読み直し、舞空術がうらやましいなと思っていた。小さい頃にピーターパンのビデオを見て、いま寝ている二段ベッドから飛んでみたけれど、願い叶わず落下した苦い経験がある。ティンカーベルがいないからだと当時は思っていたが、現実がわかってきたいまはもう飛んだりはしない。せめて夢の中でいいから空を飛ばすように、と願いながら僕は眠りについた。

空を飛ぶ夢は見れなかったけど、夏休みの激烈な風は、上昇気流となって僕を大空高くに連れていってくれるはずだ。

まだ朝の8時だというのに悠斗が僕のうちにやってきた。玄関から「たーくーちゃん！」という悠斗の大声が聞こえてきて、僕を夢の世界から現実の古河家に呼び戻した。長い夏休みが始まった。

悠斗は近所に住む一個下の小5の友達だ。外で遊ぶのが好きだからか、地なのか、真黒に日焼けしている。冬でも黒いからたぶん生まれつきだろう。猫っ毛の髪は茶色がかっていて、いつも七三のように分かれていた。

悠斗のうちのファミコンがないから、うちに来るとほとんどの時間はファミコンだ。古くてカバーが破れつつあるスーパーマリオが大好きで、体を傾けながらコントローラーを操作する。動きが大き過ぎて、ファミコン本体が揺れてフリーズすることもあった。ジャンプの加減が下手くそで、幅の広い谷があるステージでゲームオーバーになることが多い。マリオはとっくに飽きていたから、僕はやらずにずっと悠斗にやらせてあげた。負けず嫌いの悠斗はこの夏休み中に全面クリアしたいらしい。テレビの中のマリオを真剣な眼差しで追っている悠斗の額から汗が流れ落ちた。太陽も上空高くに上がっている。かれこれ3時間はプレイしているが、8-1が鬼門だった。定期的に聞こえてくるマリオ死亡の効果音を子守唄に僕はまどろんだ。100万回死んだら、きっとどこかの猫と同じになれるだろう。うっすらとする意識の中、僕はそんなことを考えていた。

もう扇風機では涼めない暑さの不快感で僕は目を覚ました。ミッキーの赤いランニングシャツが汗だくだった。いつの間にゲームをやめたのか、悠斗も床にうつ伏せに寝ていて、茶色がかった髪の毛を汗が伝っていた。起き上がってマリオのオープニング画面がつけっぱなしになっていたテレビの電源を消したとき、グググとお腹が鳴った。もう正午を少し回っていた。

「お母さん！ ごはんちょうだい！」

僕はテレビの声が聞こえる居間に向かって叫んだ。母親の返事を聞いた僕は安心して、床に転がっていた少年ジャンプの続きを読み始めた。もう好きなのは読み終わっていたから、残りはあまり面白くない作品の消化試合だけだったが。

氷水に浸した冷えたソウメンをすすりながら、僕と悠斗は夏休みの計画を立てた。太陽はさらに高くなっていたが、先ほどまでの暑さはソウメンで洗い流され、僕たちはノートにつけ汁をたらしながらアイデアを書き込んでいく。カブトムシ、川、プール、探険、野球、遊園地、エロ本探し、クワガタ、ミニ四駆。僕は何度もシャーペンの芯を折りながら大きな字で書いていった。学校があるときの日曜日と同じパターンだが、連日の計画にできるのは魅力的だった。書き終わったノートを手にして扇風機に揺られながら、悠斗は書き殴られたアイデアを反芻する。突然ひらめいたように、

「ファミコン！」

と騒ぎたて、ノートに追加した。そのときの悠斗は、マンガのように頭の上に電球が点いて見えて、僕は笑ってしまった。すでに初日の半日はファミコンで費やしてるよと苦笑しながら、僕は悠斗の満面の笑みを眺めやった。

「はやくクリアーして飽きろ」

僕が冷やかすと、ムツとしたのか、悠斗は黙ったまま再びファミコンの電源を入れた。悠斗がクリボーを踏みつぶす寸前に電源を切り、

「今日はおわり、悠斗、お前早く宿題やっちまえよ」

と兄貴ヅラをして言い、おもしろくなさそうにしている悠斗の肩をたたいて家に返した。居間の窓から、悠斗が走って家に帰るのが見えた。

悠斗、長い夏休み、たくさん楽しもうな。

僕はファミコンにドラクエ4を入れ直した。第4章の戦闘テーマ「ジプシーダンス」に、子供ながら魅惑を感じながら。僕は占い師のミネアよりも、踊り子のマーニャの方が好きだ。

オレンジ色の太陽の光が水しぶきを透過してつくった心地よい眩しさに、冴子は目を細めた。水面に広がる薄い波紋が消えていく。かわりにできた虹の中から、冴子が反撃に転じて透明な水をとばしてきた。散弾のように広がる水滴が上半身に当たる前に、僕は水の中に潜る。そのまま水底を平泳ぎで進み、冴子の攻撃が届かないところで浮上した。

「拓、逃げんの速すぎ」

僕が避けたせいで冴子の攻撃を顔面に受けた敬太が僕をからかう。

「ホント、拓ちゃん逃げてばかり！」

冴子が両手ですくった水をまたとばしてきたが、今度は距離があるのでもちろん僕には届かない。かわいそうな敬太が二度目の被弾をして、拭ったばかりの顔を再び濡らした。

「敬太、にぶいな」

そのとき監視員の吹くホイッスルが水鳥のように水上に鳴り響いた。僕は冴子と敬太に手をふり、ふたりが上がりようとしているプールサイドとは逆側に上がった。真夏の太陽が焼いたコンクリートに子供たちの足跡が並び、まるで透明人間が通り過ぎたように見える。僕の身体から滴る水も地面に吸い込まれ、やがて消えてなくなった。

僕はコンクリートの上に仰向けに寝転がり、太陽と光と水がつくるキラキラした虹色の模様を目で追った。それらが点滅しながら僕の視界の外へ外へと移動していくのを追っていると、冴子と敬太がこちらに小走りしてくるのが見えた。僕は目を閉じてふたりが言うであろう言葉をかわそうとしたとき、突然顔にピシャッと水の塊が落ちてきた。思わぬ冷たさに目を開けると、冴子が上から見下ろし、クスクスと笑っていた。敬太も冴子の後ろで大声で笑っている。冴子が手をすくって隠し持っていたのだろう。僕はため息をついて上半身を起こし、まだ顔についている細かい水滴を指で拭いた。コンクリートで焼かれた背中をさらに焼こうと追従してくる太陽が後ろから僕を見ている。

冴子が僕の隣に座り、彼女の隣に敬太が座った。冴子は体育座りの格好をとり、プールの逆サイドを遠い目で見ていた。低学年のやつらがプールサイドを走り回り、監視員に注意されていた

。

冴子は僕と同じ六年生でクラスもいっしょだ。小学生にしては背が高く、**160**センチ近くある。勉強は普通だが運動神経が高く、バスケットボールでキャプテンをしていた。僕のうちの近所に住んでいて幼稚園からの仲だ。ショートカットの髪が細い首にしまれている。そしてばれていると思うが、切れ長の涼しそうな目で遠くを眺めている冴子を僕は好きだった。

冴子の隣に寝そべって体を焼こうとしている敬太も同じクラスのやつで、僕と同じ少年野球チームに入っている。近所ではないが、同じクラスになることが多かったのと、野球チームでいっしょにやっつてたから仲が良かった。敬太は勉強はまったくダメだが運動神経が高く、ピッチャーをやっていた。喧嘩することも多かったけど、一夜明ければ仲直りできる気がおけない親友だ。

「なあ、夏休み、何して遊ぶ？」

敬太が仰向けで空を見上げたまま言い、「毎日プールってのもダルいよな」と付け加えた。僕はまだ髪の毛がしだれたままの冴子の肩越しに敬太に話しかけた。

「昨日悠斗とも話したんだけど、やっぱ川とか山とか家でファミコンとかかな、もうちょっと楽しいことしたいけどさ」

僕は太ももの水を払いながら答えた。地面に落ちた少量の水はすぐに太陽に乾かされた。正面に見える山を眺め、いつもと変わらないマンネリ化した遊びに嫌気が刺してきた。

「男くさいよ」

冴子は髪の毛をつまみながら、つまらなそうにつぶやいた。髪の毛から水が滴ってコンクリートを濡らした。

「昔みたいにママゴトとかやれるわけないしな」

そうやって前方を眺めると、太陽と光と水と子供たちと近くの山と遠くの山々の景色が、なんとも夏休みを表現していて思わず感動してしまった。そして思いついた。

「こんなのはどう？ みんなで一枚の大きな絵を描くとか」

冴子が僕の目を見つめてきたので、少しドギマギしてしまったが、そんな僕の同様には気づかずに冴子の目は強い興味と喜びに満ちていた。

「拓ちゃん、それやろう！」

冴子は飛び起きて太陽に体を向け、たくさんの光を吸い込んでそれを笑顔に変換した。

休憩時間の終わりを告げるホイッスルが鳴り響く。先ほどとは違う二匹目の水鳥を捕まえようとするかのように、冴子は青いプールに飛び込んだ。きれいな水しぶきがあがった。助走をとって僕も空に向かってジャンプした。この夏はきっと飛べる。

小学校用品販売で生計をたてていそうな町の文房具には僕が思い描いている大きな画用紙が

なかったから、父の車で遠くの画材屋に連れていってもらった。10時に冴子を誘っていっしょに連れてきた。冴子も僕も昨日のプールですっかり日焼けして、鼻の頭も腕も赤く焼けていた。

父が若い頃に油彩画をやっていて、これから行く店は昔からあるらしい。もちろん僕たちは油絵はできないから、水彩画を描こうとしている。冴子は図工の授業も得意で、校内の写生コンクールで入賞することも多かった。

画材屋には色とりどりの絵具やいろんな太さの絵筆、どう使うかわからない道具、そして惚れ惚れするような画用紙が何種類も置いてあった。僕はみんなでいっしょに描いていけるような畳くらいの大きさの画用紙を想像していたが、もう少し縦幅のある紙があったのでそれを買った。店員が慎重に画用紙を丸めている間、冴子と僕はレジの前で売られていた「水彩画の書き方」の表紙に描かれた風景画を見て、これから描く絵のインスピレーションを得ようとした。父が僕たちの目標に一役買ってくれて、学校にある絵具よりも色数の多い24色の水彩絵具をプレゼントしてくれた。使うかどうかはわからないが、金色と銀色の絵具が含まれているやつだ。僕は毛の先がピンと伸びた新しい絵筆を、冴子はアクセントに使う12色のクレヨンをそれぞれ買って、夏休みの絵に向けて心を高揚させた。どうか素敵な絵ができますように。僕は隣のシートに座る冴子の横顔に願いを込めた。僕の視線に気づいた冴子はこちらを見て微笑んだ。こんな冴子を絵の中に描きたいと思った。

画材屋の帰りに、国道沿いにあるハンバーグ屋に連れていってもらった。ハンバーグが好きではなく渋っていた父に、その店のハンバーグがどうしても食べたいとワガママを聞いてもらった。僕と冴子はチーズハンバーグを、父はミートソーススパゲティを注文した。絶対にこの店自信のメニューではないはずなのに、もったいないなと僕はぼんやりと考えてた。

ミートソースを頬張りながら、父が美術部だったころの昔話をしてくれた。勉強は嫌いじゃなかったけど、それよりも絵を描くことの方が好きだったこと。絵を描き続けながら農業大学に進学したかったが、家業を継がなければいけない状況になって大学は諦めたこと。仕事が忙しくなって絵を描く時間がだんだんと少なくなってきて、やがてやめてしまったこと。僕は今までほとんど知らなかった父の若い頃の話聞いて、いくつもの挫折と諦めを経験してきた父の気持ちを想像してみたが、あまり感情移入はできなかった。僕たちのいまこのときの気持ちを遮るものなんて何もないと思った。

そんなことを考えているうちに、いつのまにかチーズハンバーグはなくなっていて、大根サラダとその上にのったミニトマトだけになっていた。肉汁にサラダの水分が溶けてマーブルリングのようになり、僕はその不思議な模様と色彩に目を凝らした。反射する油と水が父の涙のように思えて父を見やると、ミートソースを食べ終わった父はタバコの煙を天井に向けて吐き出していた。白い煙は行く当てなくさまよっていたが、やがて空気に吸い込まれて消滅した。

最初に下書きの線を入れたのは冴子だった。真白な横長のキャンパスの右上の方に円を描き、夏らしいカンカンと照りつける太陽（まだ色はないが）を中空に昇らせた。僕は冴子らしいと思ったし、僕の中ではいつも冴子は太陽を思わせる女の子だった。

敬太が手前の方に広大なグラウンドを敷く。自分たちの野球場を絵の中につくりたいのだろう。敬太がグラウンドを横へ横へと広げてくるのに我慢できず、悠斗が

「敬ちゃん、グラウンドだけであんまりスペース取らないでね」

と敬太に注意して、自分は右の方に森林を植えた。

夏美が敬太と悠斗のやりとりにキャツキャツと笑いながら、悠斗の描く森の中に川を走らせた。夏美は僕のひとつ下の小学5年生で、悠斗と同じクラスのかわいい女の子だ。運動クラブには所属していなくて文化系が得意だ。今回の作品にも大きな貢献を果たすだろう。

「悠斗くん、川の上流も描きたいから、森をつなげないでね」

夏美は悠斗の森林管理者になり、悠斗は植林者になった。悠斗が夏美の川に沿ってどんどん木を植えていく。子供にありがちなクリスマスツリーの絵のようなギザギザしている木だ。夏美は川の中流につり橋を架けた。グラウンドと森を行き来できる木でつくられた橋が、街と自然の境目になった。

僕は敬太のグラウンドの隣にプールをつくった。ただのプールでは飽き足らず、ウォータースライダーも付け足した。

「こんな山の中にこんなプールがあったらいいよね」

冴子が太陽の下に山々を隆起させながら嘆いた。キャンパスの上から逆向きで描いているのに上手なタッチで描き込んでいく。

5人で同時並行的にキャンパスにオブジェを描いていき、有機的に結びつき、うねり、やがて僕たちだけの街が生まれた。冴子が人間はまだ描かないように最初に指示していたから、いま生まれたのは人の住んでいない空っぽの空間だ。僕たちはこの街に「ソラ」という名前をつけた。夏の青空のようにまっすぐに透き通って、僕たちを宇宙まで連れてってくれる街だ。

水面がキラキラとしているのは、きっと魚の群れがいるからだ。ゆったりと水の流れる音がする。近頃雨は降っていないから、底まで見えそうな透明な水が清々しい。川から伸びる坂道の先には、稲が田んぼを青々と染めていて、収穫の秋に向けてすすくと歩を進めていた。

僕は川を見下ろした。7メートルくらいだろうか、小学校の3階から見下ろした花壇と同じくらいの高さだ。後ろから敬太が僕の肩を掴み、眼下の川を覗き込む。

「おい、敬太、絶対押すなよ！」

敬太が肩に手を乗せてきたので、僕は思わず身震いした。敬太の顔が珍しく真剣味を帯びていて、僕もこの高さの恐怖心に頭が乗っ取られそうになった。

「拓、これって、かなり高くないか？」

敬太がツバを飲む音が聞こえてくる。

「学校の3階くらいあるな」

僕の声は限りなく小さくなっていった。12歳の男二人が怖がっている姿はさぞ滑稽だろう。

橋の上は通行止めになっていたから車は通らないが、近くの砂利道を農作業のための軽トラックが通り過ぎていく。車が砂利を蹴る音の響きだけでも、僕たちを橋の上から押し出す力があるように思えた。

「おい、お前から飛べよ」

敬太が後ろから声を殺して言う。僕は重心が変わらないように慎重に敬太に振り返り、「お前がいけよ、言い出しっぺだろ」

と言り返す。敬太は信じられないといった顔をして「無理無理」と首を振った。

「パー山は俺から飛んだろ。今回は拓から飛べよ」

痛いところを突かれたと僕は思った。確かにパー山の砂地を最初に飛んだのは敬太だった。あ

のとき敬太は着地に失敗して、膝に大量のすり傷をしたのだった。僕は震える足を鎮めようと、膝に手をついた。真夏なのに汗もかかず、体は冷んやりとしている。眼下の川が静かに僕を見据えていた。

「深さは十分あるんだから大丈夫だって」

ならお前から行けよと言われてもおかしくない安易な気休めを言われて僕は我に返った。わかったよ、飛んでやるよ。

真下の川の流れはゆるやかだが、ずっと見続けていると、何者かの目があるような錯覚に陥った。いまかいまかと僕を待ち構えてる水の神様、いや、悪魔だ。僕は欄干をまたいでそこに腰掛けた。もうこれ以上僕の前にスペースはない。着地点から最も近い場所に僕はいるのだ。空を見上げると、今日も太陽は変わらずに輝いている。太陽から地球まで何キロあるのだろうか？ 太陽に行ったら、今よりも何億倍も高いところから地球を見下ろすことになるのだろうか？ そんなことを考えていたら、いま僕が窮している7メートルくらいの高さなんて、小石をハンマーで粉々にした破片くらいのものでしかない。

僕は橋から飛び立った。あろうことか、上に飛んでしまった。7メートル50センチのダイブだ。

時間が止まった。水面が近づいてこない。僕は飛び上がった750センチ地点にずっといた。遠くの青い山々が見え、青い田んぼが見え、止まった時間の中で下を見ると蒼い川が見えた。さっきまで透明だったのに、飛んだ瞬間に、水中に何があるかわからない黒々とした紺碧色に変わっていた。

僕は金縛りにあったような止まった時間を破るように、

「ワーッ！」

と叫んだ。突然時間が動き出す。山々が動いた。田んぼが視界から消えた。紺碧の壁が近づく。僕は両手を左右に伸ばし十字架になった。

「ドボン！」

水面に足が入り、頭が入り切るまでの間、こんな風に水が割れる音が聞こえた。僕は川の奥底へと吸い込まれていった。敬太のいうとおり、川は深かった。なかなか底につかない。しかし、

浮力よりも重力が強かったのか、少しだけ底につま先がついた。ぬめりとした。何かに引っ張られそうだ。僕は反射的に足を引っ込め、水面に向かって必死に泳いだ。

「ぷはっ！」

橋上から敬太が欄干に手をつけて心配そうに見ていたが、僕が浮き上がってきたのを見て、表情を緩めた。僕は敬太から視線を上に移した。空が青い。空って青いな。

「気持ちいいー！」

僕は大空に向かって叫んだ。そのまま仰向けになって体を水面に浮かべた。

「ワーッ！」

敬太の叫び声が聞こえる。自然いっぱい自己を主張する敬太の声を聞きながら、僕は水の流りに体を委ねた。

浮かんできた敬太の表情は清々しい苦笑いを浮かべていた。僕たちはハイタッチをして、再び橋上につながる岩を登っていった。

僕たちの街「ソラ」に少しずつ人々が増えてきた。空っぽだった街に賑わいが生まれた。冴子が森の中にかわいい女の子を描き、僕がその隣にあまりかっこよくない男の子を描くと、画用紙の中の世界が動き出す。縛られたはずのふたりが森の中を歩き出し、木の実を拾い、追いかけている。画用紙を何百枚も束ねてつくったパラパラマンガを見ているようだ。

敬太は書き慣れた野球少年たちを18人描き終わっていた。少年たちが、ボールを打ち、空振りし、走り、ダイビングキャッチをする。敬太がつくった広いグラウンドで、汗だくになってプレイする少年たち。ボールが金属バットに当たって鳴り響くキーンという音が、グラウンドの端を通り過ぎ、僕たちのいる森にまで届いた。

夏美は森の中のベンチに座って編物をしている髪の長い女の子を描いた。女の子が戸惑いながらも編んでいくと、糸は手袋の形になっていった。夏なのに手袋を編んでいるのが変だった。

「みんなの手袋を作りたいから、今から作らなきゃダメなの」

僕の不思議そうな表情から推したのか、現実世界の夏美がつぶやいた。

「いま完成しそうなのは誰の手袋？」

僕は優しい微笑みを浮かべた夏美に質問してみた。

「悠斗くん」

即答だった。なるほど、そういうことか。夏美も絵の中の女の子も、ふたりいっしょに鼻歌を歌っているような幸せそうな顔をしていた。

プールに何かを描いている悠斗を横目で見ると、僕と夏美の会話に気づかないくらい集中している悠斗がいて驚いた。相変わらずの汗っかきで、細い髪は毛筆のようにまとまっていた。いくつかの汗が画用紙に滴っても、それにも気づかないでいた。

僕は少しだけ前のめりになって、悠斗が操る絵筆の先を追った。悠斗は飛び込み台の上に下手なマリオのイラストを描いていた。

「悠斗、マリオはないだろ。そこから落ちたらお約束のゲームオーバーだ」

僕は自分の絵筆を悠斗の前に出して邪魔をする。悠斗は僕を無視して、飛び込み台の下にクリボーを描き始めた。ソラの中にゲームのキャラはいらない。ここは僕たちだけの街なんだ。

「悠斗、ソラで遊ぶな！」

悠斗の筆の動きが止まった。一瞬惚けた顔をしたあと悲しそうにキャンパスを見ていたが、やがてプールの中に子供たちの絵を描き始めた。クロール、バタ足、浮輪。悠斗の描く人間はいろんな泳ぎ方をしていた。ウォータースライダーを頭から滑っている坊主頭の男の子もいたし、飛び込み台から飛び降りて、台とプールの中空に止まった水中メガネをかけた男の子もいた。

僕は橋からダイブしたときの爽快な気持ちを思い出していた。はじめの1回に時間がかかったが、2回目からは僕も敬太も夏の花火大会のようにドンドンと橋上から打ち上げられた。恐怖に打ち克ったあとの快感は言葉にできないくらいの気持ち良さで、僕も敬太も無言で空を飛んだ。何度も何度も。

橋の上から見る景色がフェードアウトしていくと、飛び込み台の上にひとり、描きかけの足のないマリオがいた。ヒゲが鼻の上にある。おかしくて僕は笑ってしまった。

冴子と敬太と夏美が帰ったあとも悠斗は僕のうちに残り、飽きもせずスーパーマリオをプレイしていた。あいかわらずマリオの死亡音が、悠斗の悔しそうな舌打ちや溜息といっしょに僕の耳をなでる。

「悠斗、さっきはごめんな」

悠斗がソラにマリオを描くのを咎めたことを僕は謝った。悠斗がコントローラーのスタートボタンを押し、ゲームを一時休止した。空中に止まったマリオの位置からすると、再開時には間違いなく谷底だ。

「拓ちゃん、これ見て」

悠斗は水色の半ズボンのポケットから1枚の紙切れを取り出した。僕は受け取って、折りたたまれた紙を開いた。

紙面には「好き」という言葉がたくさん書かれていた。悠斗宛のラブレターのようなようだ。

「拓ちゃん、最後なんて書いてあんの？」

僕は手紙の最終行に視線を移した。夏の西日が、最後の行をオレンジ色に照らした。

「I love you」

と書かれていた。イロベヨウ？ なんのことだろう。

「ごめん、わかんない。たぶん、好きとか？ 悠斗モテるんだな」

悠斗の顔が、イロベヨウと同じオレンジ色に輝いた。悠斗はマンガのイラストのような満面の笑みをし浮かべ、マリオの世界に戻っていった。予想通りの死亡音が今回だけは心地よい。

きっと夏美だ。手編の手袋はきっと夏休みの間に悠斗にプレゼントされるのだろう。まだまだ使う機会のない手袋だけど、きっと悠斗も夏美も心が温まりそうだ。僕は手紙に目を落とした。

「悠斗くんへ

いつも元気に走り回ってる悠斗くんが好き。わたしは追いつけないけど、悠斗くんを見てるだけでいいの。たまに手を振ってくれる悠斗くんも優しく好き。お盆前にお父さんとお母さんと遊園地に行くんだよ。悠斗くんにも来てほしいな。観覧車のおつぺんからわたしたちの街を見てみたいな。

「I love you」

天に向かって水鳥が鳴いた。鳴き終わる前に僕はプールに飛び込み、**25**メートルプールの半分くらいまで潜水で泳いでいった。敬太は飛び込み台の上で太陽に向かって両手を上げている。そして僕を指差して不敵な笑みを浮かべ、前屈してスタートのポーズを決め、プールに飛び込んだ。

敬太はクロールで一気に僕に近づいてくる。潜水艦に狙われる空母のように迎撃はできないから、僕は反対側に逃げる。もちろん逃げ足の早いクロールを選んだ。

敬太を振り返りながら泳いでいると、突然僕の逃走が止められた。誰かが僕の腕を掴んで水をかけなくしたのだ。意味がわからないイタズラをしたやつを確かめようと水面から顔を上げると、真黒に焼けた悠斗がにやけていた。

「拓ちゃん、逃げてないで攻めろよ」

悠斗の隣からキャッキョと笑い声がする。夏美だ。悠斗のにやけ顔は、逃げる僕がおもしろいだけではなく、きっと夏美と遊んでいるからだ。夏美の顔が水滴で輝いているが、瞳の輝きだけは水ではなく内からの喜びの気がする。

「競走なんだから攻めるとかはしないの。なんだよ、夏美まで笑うなよ」

悠斗も夏美もクスクスと笑い続ける。僕をネタにふたりが共有感を育てているのが気に入らない。今日は冴子が来ていないから、僕は少し嫉妬した。そうこうしているうちに、あっさりと敬太に捕まってしまった。

「敬太、援軍は反則だ」

悠斗と夏美は敬太に拍手を送った。

「拓、いいわけはなしだぜ」

敬太は、信じられないというように両手を広げた。

「そうだそうだ！」

夏美まで右手を伸ばして声援を送る。完全に僕がアウェイだ。

僕に鬼役が変わった。敬太が逃げ始めて**10**秒がたった。僕は悠斗と夏美に水攻めをして、ふたりに精一杯の嫌がらせをして敬太を追った。悠斗がお返しとばかりに水の光線を打ち込んできたが、もう届かない。

敬太との距離は**10**メートルくらいある。人が増えてきたからまっすぐ泳ぐこともできず、方向

転換しながら追った。全然追いつきそうになかったから、僕はプールの真ん中で立ち尽くしてまわりを見やった。児童で埋め尽くされたプールが、まるで僕たちが描いている絵の中の夏休みのようだった。知っている顔、知らない顔、たくさんの子供たちがそれぞれのグループをつくって僕たちと同じように楽しんでいるのが不思議だった。きっとみんなが、何もないこの街で楽しめる場所、学校のプールに集まってそれぞれの夏休みを謳歌している。二学期の始業式では、すっかり日に焼けた子供たちで学校は真黒に染められてしまうのだろう。

運動の苦手な夏美がビート板をつかって泳いでくるのが見えた。同じクラスの女の子と競争をしているのか、もうひとりの子もビート板を前に掲げてバタ足で泳いでいる。夏美の方が遅くて、前の子を必死になって追っている。息継ぎを苦しそうにしている夏美が横を通ったので、僕は声援を送る。

「夏美！ 負けたら絵は描かせないからな！」

あいかわらず大きな呼吸音をさせていたが、夏美のバタ足が少し速くなったような気がした。水しぶきが大きくて無駄な動きが多い、文字どおりのバタ足で、夏美は少しずつ泳ぎ進む。前を泳ぐ子まで2メートルくらいにまで詰め寄ったけど、夏美の負けだった。夏美はプールの飛び込み台に手をかけて、肩を揺らして呼吸していた。

鬼ごっこのことをすっかり忘れていたことを思い出して敬太を探すと、プールサイドから足だけプールに入れて、手持ちぶさたに水をバシャバシャと蹴っていた。

「拓、ちゃんとやれよ。夏美の応援なんかしてないで」

僕は敬太の言葉を無視して、背泳ぎで夏美の方にゆったりと泳いでいった。耳に水が入って、まわりの音があまり聞こえない。太陽と空を水と僕だけの世界になった。小学生最後の夏休みは、何かと空と水に縁があるようだ。

指先がプールの壁についたとき、休憩を知らせるホイッスルが鳴った。耳が聞こえにくい分、水鳥の声が悲しく聞こえた。

夏美は友達と話していたが、「またね」というとプールの向こう側に歩いて行った。悠斗のところに行くのだろう。女友達よりも男をとるとは、ずいぶんなおマセさんだ。僕は仰向けになって、冴子のことを考えようとしたが、強制終了されてしまった。頭上から敬太の不機嫌な顔が覗いていた。

「拓、俺もう帰るぜ」

「だな、今日はもう帰るか」

「冴子がいらないからつまないんだろ？」

「そんなことは、ある」

敬太が唇をとがらせていたが、ふと何かに気づいて横を向いた。

「夏美、そんなに走ったらすべって転ぶぞ」

「敬ちゃん！ 悠斗くん知らない？」

多くても25メートルしか走ってないはずなのに、夏美は苦しそうに呻いている。よほどダッシュしたんだな。

「こっちには来てないな。拓も知らないよな？」

僕は起き上がって夏美を見て、首を振った。

プールサイドの真ん中くらいから、女の子の声が聞こえてきた。まだ耳がうまく聞こえないから、僕は立ち上がって片足でとんとんとジャンプして、耳の中の水を抜いた。生温い水が頬から首に伝っていった。

「先生、誰かプールで泳いでます！」

人工呼吸で泡を吹いたときは助かるかもしれないと思ったが、悠斗は病院に運ばれて40分後に息を引き取ったらしい。僕たちは救急車には乗せてもらえなかったから、悠斗が死んだ翌日に聞いた噂話だ。テレビに僕たちの小学校のプールが映っている。右上には僕が昔から知っている、近所に住んでいる声がうるさくてファミコンの下手な悠斗の写真があった。画面の下には白い文字で「小学生がプールで死亡」とテロップが書かれていて、僕は何の冗談なのか理解できなかった。テーブルの斜め向かいで母親が泣いているのも、理解できなかった。

「お母さん、なんで泣いてんの？」

母親は何も言ってくれなかった。

プールが休みになって暇だったから、僕は悠斗のうちにしようと思った。悠斗のうちにファミコンもないし、お菓子とかも出してくれないから、ふだん行くことは少ない。でも、たまに行くのも悪くはない。

悠斗のうちの玄関前に、白い紙に習字が物々しく書かれていたが、僕は素通りする。夏休みに習字の課題はない。玄関が少し開いていたから中を覗いてみると、悠斗の母親が父親の肩に寄りかかって大声で泣いている。泣き声というよりは嗚咽に近くて、僕は少しだけ怖くなった。悠斗のうちに入るのはやめておいた。

昨日まであんなに晴れていた空が、今日は重い灰色に覆われている。空と水に縁があるように思えたのは気のせいかもしれない。

夏美は悠斗から離れようとしなかった。夏美はマセているから、きっと僕よりも物事の理解力が高いのだ。でも大人と思える反面、夏美は子供のように泣き続けた。嫌がる夏美を、無理やり彼女の父親が悠斗から引き離した。僕と目が合ったときに見えた夏美の瞳は、何日間も泣き続けた傷跡のように赤く染まっていた。

僕は悠斗を真上から見下ろした。真黒に焼けた、焦げ茶色の髪の毛をした悠斗がそこにいたが、いつもの笑顔はなかった。

「悠斗、笑えよ」

僕は誰にも聞こえないくらいの声で悠斗に話しかけた。悠斗から返事はなく、微動だにしなかった。いつもと違う、非日常的な空気が場に重く流れていた。

僕はポケットに手を入れ、四角い固まりを取り出した。スーパーマリオのファミコンカセット。僕はそれを悠斗の顔のとなりにそっと置いた。悠斗の表情が動いた気がしたがそれは気のせいだ。悠斗が揺れて、ぼやけた。悠斗が死んだ。

夏美と同じように、僕は母親に悠斗から引き離された。これが、僕が悠斗を見た最後の日になった。

僕たちの夏休みの絵が完成することはなかった。鉛筆で描かれた自然と人工物。中途半端に塗られた空と太陽。鼻の上にヒゲがある変なマリオ。

あれからちょうど1年だ。僕は足のないマリオに足を描き足した。やっと悠斗のマリオは地に足をつけた。

「悠斗、マリオをジャンプされてクリボーを踏みつぶしてやれ」

玄関から音がする。母親が僕を呼ぶ声が聞こえる。

「拓、お友達が来てるわよ」

最後に観覧車を夏美が描いて、僕たちの街「ソラ」は1年越しで完成した。観覧車には僕も乗っていて、隣には冴子もいた。かわいそうな敬太は僕たちの下の箱にいた。そして一番上には夏美がひとりで観覧車に乗っていた。絵の中の夏美は笑っているが、目の前にいる夏美は絵筆を揺らし、絵に涙を落としてせつかく描いた観覧車をにじませた。

冴子が夏美のつくったにじみを吸い取り、夏美の隣に悠斗を描いた。あの日のように、真黒に日焼けした、みんなが知っている満面の笑みの悠斗だった。

僕はふと1年前の出来事を思い出し、中学校で使いはじめた英和辞典を机の本棚から手に取った。Lのページを開き、LOVEの項を探し、I love youの例文を探し出した。

冴子に頭をなでられ泣いている夏美に苦笑した後、少しだけ泣いて、僕は英和辞典を閉じた。

なつやすみのとも

<http://p.booklog.jp/book/49504>

著者：橋本コウ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/koohashimoto/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/49504>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/49504>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.